

# 四国中央市 歴史探訪

## 蘭・竹・梅・菊

# 四君子の草木

3月の別名は「弥生」。草木がいよいよ生い茂る月「木草弥や生い月」がその由来と言われます。みなさんの周りでも、草木の息吹が感じられるようになったのではないのでしょうか。

今回はそんな草木の中でも、水墨画の画題として親しまれている「四君子」の草木について、郷土の画人が描いた作品とともにご紹介します。

四君子とは「蘭・竹・梅・菊」のことを言います。これらの草木が持つ特性が、「君子（人徳・学識・礼儀に優れた人）」としての特性に似ていることから、水墨画発祥の地である中国においては、画題としてはもちろん、鑑賞用としても古来より人々に愛されてきました。

## 蘭く清逸く

優雅な姿とほのかな香り、俗世を離れた幽谷でひっそりと咲く、蘭の花。清らかで世俗性を帯びない蘭は、善人や君子に例えられました。また、徳を持ちつつも世に出られないでいる隠君子の比喻としても用いられました。



▲ 竹に蘭 西山小林

## 竹く節操く

天に向かってまっすぐに伸びる竹。その純粋な姿に加え、しつかりとした竹の節々は、何事にも耐える忍耐力と決して折れることのない節操を連想させます。人々はこうした竹の姿に君子としての品格を重ねたのでしよう。

## 梅く高潔く

冬の終わりから春の初めにかけて、どの花々にも先立って咲く梅の花には、凜とした気高さと強さ、そして清らかさが兼ね備わっています。そんな梅は詩や書画の世界でも古来より人々に愛され、絶大な人気を集めてきました。

## 菊く淡白く

菊は、草木が枯れ始める晩秋の寒さの中で静かに咲きます。世に隠れた場所で上品に咲き誇るその姿

は、言や名声に対して無心無欲、淡白であるといった君子の比喻として、広く使われるようになりました。

清逸、節操、高潔、淡白。古代中国の人々が四つの草木の姿に重ね見た、理想とする人間の姿や生き方。それらを愛する精神性は、水墨画という文化を通して日本にも伝わり、日本人の心の中にも息づいています。

海を越え、時代を超えて継承される「文化」の中には、人間にとって普遍的に大切な、また大切にすべき何かが隠れているのではないのでしょうか。

草木いよいよ生い茂るこの3月。春夏秋冬、一年を通じて、四君子の草木が私たちに見せてくれるその姿の中に、または描かれた水墨画の中に、人としての在り方や生き方を見出し、自分を見つめ直すこと…。そうした心のゆとりや文化への眼差しが、自分をより豊かなものへと成長させてくれるのかもしれない。みなさんも宇摩に残る文化を通じ、その一端に触れてみてください。

### 【問い合わせ先】

高原ふるさと館  
28・6260



▲ 梅 大西黙堂



▲ 菊 続木石鴻元